

# ZINEづくり



2026.2.23

発行：釜ヶ崎芸術大学

A Collective Publication: ZINE

合作俳句 お題は

## 方言

<p>春はオーケストラ</p> <p>フシヤミし放題</p> <p>心地良い</p> <p>23/2/26</p> <p>たけし</p>	<p>から守る</p> <p>木の葉どんぶり</p> <p>ほかしとく</p> <p>23/2/26</p> <p>たけし</p>	<p>揺りかご</p> <p>ジュットコースター</p> <p>じころころ</p> <p>23/2/26</p> <p>たけし</p>
<p>ほうげん</p> <p>火報知器</p> <p>誤作動</p> <p>香葉 (Kawabata)</p> <p>2026.2.23</p>	<p>すべり台</p> <p>不適切</p> <p>郷がもふ</p> <p>微分積分</p> <p>わすれたわ</p> <p>2026.2.23</p>	<p>宇宙人</p> <p>宇宙から入る</p> <p>Maybe aspired?</p> <p>2026.2.23</p>
<p>赤の他人</p> <p>知らんけど</p> <p>ヒトヒトイアウ</p> <p>2026.2.23</p>	<p>ダンゴ虫</p> <p>関西弁</p> <p>拡大鏡</p> <p>2026.2.23</p>	<p>おかん会</p> <p>北欧の街にて</p> <p>2026.2.23</p>

## 合作俳句に参加して

今回、初めて合作俳句に参加した。最初の語句は「方言」をテーマに書き始めたのだが、その後の流れがとても独特だった。一度書いた語句を他の人と交換し、受け取った句に関連性を気にせず自分の思いついた語句を重ねる。そしてまた別の人と交換し、最後に締めくくりにふさわしい語句を加えて一句を仕上げる——この手順は、正直なところ、かなりメチャクチャでカオスに感じられた。

しかし不思議なことに、そうして生まれた句は意外な展開を見せながらも、どこか腑に落ちるまとまりを持っていた。他者の言葉が自分の発想を揺さぶり、自分の語句がまた誰かの句に影響を与える。その連鎖の中で、思いもよらない一句が立ち上がる面白さを強く感じた。

ランジョー(発達障害当事者)

---

## ドッジボールのようにリズムを詠み回す

久しぶりに合作で俳句を詠んだ。自分とは違う身体のリズムに心躍った。

「方言」というお題は、ぼくの口から出た言葉だった。なんとなく、最近考えてること。ぼくが生まれ育ったところの方言は、熊本弁とも違う、「球磨弁」と呼ばれるものである。多くの体感だけど、球磨弁は、熊本弁の語彙が7.5割に、鹿児島弁のそれが1.5割、宮崎弁が0.5割。でもイントネーションは熊本。鹿児島と宮崎は異次元だ。南国だ。

たまに地元のひとと会うと、「つい」方言が出てしまう。その「同じさ」が心地いい。だから関西のひとが羨ましい。自分の生まれ育った言葉、自分の身体にフィットした言葉をここ関西でならいつでもどこでも気兼ねなく喋れるんだから。まさに特権だ。ずるい。合作俳句でも関西の言葉がいくつか出た。ほんと羨ましい。でも、いい。ふだんのぼくとは違う言い回しが次々と出てくる。不思議と楽しくもある。おかげで〈こっちも!〉と大胆に投げ返せる。地元のひとが「ぎゃんして、ぎゃんたい」って言うみたいに。ドッジボールのように。ぼくは下の句をスペイン語でしめた。

とこノ毎床玲音(阪大の球磨弁話者)

---

## 木の葉井(このはどん)って、知ってる?

合作俳句中、そう話してるのを聞いたけど、ピンとこない。私は大阪で生まれ育った。でも、木の葉井もハイカラ井も、実は食べた記憶がこれっぽっちもない。今日「木の葉井」って言葉が出て、その事実気づく。

私にとって、これらの井は「食べ物」じゃなくて「文字」  
西加奈子さんの本を読む。特にエッセイには大阪の街がある。  
名前の由来はいろいろ。「ピンクのかまぼこが木の葉に見えるから木の葉井」

どんぶりの出汁の匂い、とろとろの卵の感触をまだ知らないまま。

「ハイカラ井」もそう。天かすが入っすくてからハイカラ…?  
本で読んだ「ピンクのかまぼこ」が、目の前に置かれて「木の葉みたいやな」って感じたら、その時、私は郷を思ふんかもしれへん。

香菜 (お針子)

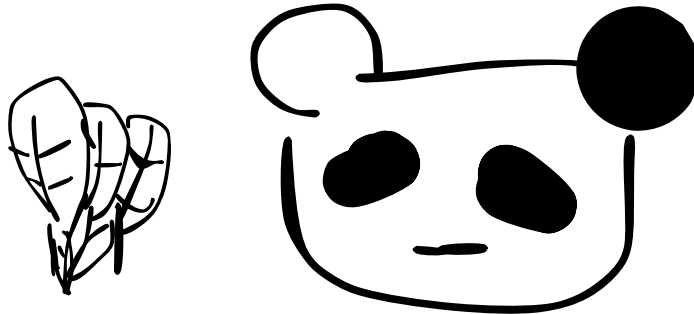


## 何でやネン 北欧の街にて おかん会う

めちゃくちゃわかる。と思いました。10回母と出かけたとしたら5回は母の知り合いと遭遇すると思います。電車で座った席の隣、美術館で列に並ぼうとするとき、歩いていたら上田さん？と声をかけられるなんてことはよくあったと思います。母なら北欧でも知り合いと遭遇するんだろうなと思っています。

学校の授業でパントマイムを教えてくれた先生も母の知り合いだったし、大学見学で行った先の学長さんも母の知り合いだったし、こんな人がいたよと母に話せば一人二人たどったら知り合いやったみたいなのこともよくあった気がします。母やばいなとしょっちゅう思います。家出する知り合いができたときは、この人が母でよかったなと思いました。そして、その知り合いと交流するにあたって、変な人と出会っておくのは大事なんだなと実感しました。でもやっぱり、母に対して私はいつもなんでやねんと思っています。

布団と格闘（高校一年生）



---

## 合作俳句について

ZINEの講座に行くと、最初に合作俳句の講義が小一時間あった。

お題は「方言」であるが、白紙の右側に各人が先ず一言を書く。

次に二行目をランダムに配られた紙に各人が書く。

再度紙は集められ、二行の締めとして自分の一行を追加する。

自分が書いたものが混じっていれば、隣の人の紙と変えてもらうので、全然知らない二行と向き合うことになる。

小説のアイデアに詰まった時は、名詞や形容詞をランダムに作って、その組み合わせで面白いと思ったものに、自分のアイデアを乗せていく手法がある。まあ、引きこもりの究極の自動発想法と言って良いのかもしれない。苦し紛れの発想法であり、これも慣れてくると、やはり個人の範疇の言葉に制限されてしまい、少しマンネリになってきたのである。

で、今回の合作俳句である。これは人外の組み合わせがあって新鮮であり、確かに他人指向ではあるが、他人の発想と、自分の発想が混ざり、奇妙な発見があった。

では、具体的に見ていこう。一番目を書いたのは、

「何でやネン 北欧の街にて おかん会う」

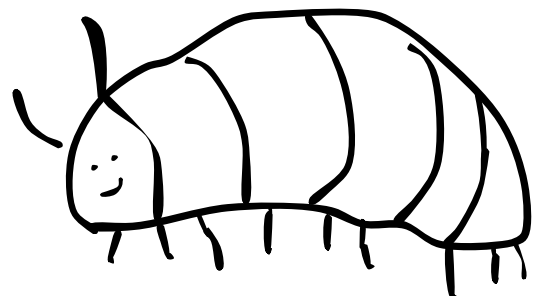
二番目を書いたのは、

「窓から入る 宇宙人 スペイン語話せますか」

三番目を書いたのは、

「関西弁 拡大鏡 ダンゴ虫」

どれも、突飛で、シュールで、想像外であった。



シンさん（堺市在住）

## Cut-Up Haiku

Al realizar este workshop, "haiku colectivo", diría que considero a las palabras no como propiedad personal, sino como un organismo vivo que controla y limita la conciencia humana. Una herramienta de control, obligando a los usuarios a ajustarse a patrones uniformes.

El método del "recorte" en este haiku experimental sirve para romper este control, para alterar la narrativa lineal y "pre empaquetada" que se nos impone liberando a las propias palabras. Así como un pintor no posee los colores, un escritor no posee las palabras, aquí se demuestra que poseen vida propia.

La experiencia verdadera y directa se pierde a través del lenguaje convencional, pre establecido y estandarizado, con este método se desvelan mundos que son capaces de crearse a sí mismos sin nuestro control desvelando escenarios inimaginables en las formas estrictas de pensamiento, creando así una tercera mente, escapando al control individual, revelando sus significados ocultos y rompiendo las estructuras gramaticales que imponen una forma de pensar lineal y predecible, una expresión que el lenguaje normal nunca permitiría.

Takeshi Herranz ("existenciante")

---

### カットアップ・ハイク（「俳句切り」）

このワークショップ、「集団俳句〔=合作俳句〕 haiku colectivo をするにあたって、わたしは、言葉を、個人の所有物としてではなく、人間の意識を支配し制限する生きた有機体として捉えていると言うだろう。〔言葉はふだん〕統制のための道具であり、〔言葉を〕使う者たちに自らを画一的なパターンへと順応させるのを強いている。

この実験的俳句〔=合作俳句〕における「切り取り」recorteの手法は、その統制を壊すのに、わたしたちに押しつけられる直線的で「前もってパッケージ化された」pre empaquetada 物語を変形させるのに役立つ——言葉そのものを解放するのだ。画家が色を所有しないのと同じように、作家〔=詠み手〕も言葉を所有しない。ここで言葉が固有の生命を持つことが示される。

真の、直接的な経験は、慣習的で、あらかじめ定められ、標準化された言語を通して失われるが、この方法〔=合作俳句の手法〕によって、わたしたちの制御なしに自らを創り出し得、世界がいくつも姿を現し、厳格な思考形式のなかでは想像できない情景を明らかにする。そうして第三の心を生み出し、個人の制御から逃れ、隠された意味を露わにし、単線的で予測可能な考えを押し付ける文法構造を壊していく——それは、通常の言語〔用法〕でなら決して許されない、ひとつの表現である。



たけし・エランツ（「存在家(そんざいか)」）〔対訳：とこノ毎床玲音〕

---

### 北欧の母

何でやネン 北欧の街にて の続きを「おかん会う」と締めた。

なんでおかんに会ったんだろう。なんでおかんなんだろう。父でも兄でも祖父でも祖母でもなく、なぜ母なのか。別に旧友でもよかったのではないか。

なぜ遠い北欧の街にて、母に会うのが自然だったのか。

合作俳句のテーマは「方言」。長野県に生まれ、家族では「方言」（らしきもの、あるいは家庭内において通用している言葉遣いや声のトーン）が話されていた。

中高生くらいのとき、私はそれが身体的にも精神的にも嫌で、そこから距離を取るために、あえて意識的に「標準語」（らしきもの）を使用していた。外国語を勉強するのも好きだった。

いわば、家庭内の言語的なノリを標準語で異化したいという欲望があった。しかし、図らずもそのノリにのってしまうこともあり、方言らしきものを話してしまうこともありました。それもまた嫌だった。

今回、日本から遠く離れた北欧の地で、母に出会った。家庭のなかでも特に親しかったのは母だった。北欧の地で私と母はどのような言葉で話すのだろうか。

大阪環状線歩いて一周男（ココルーム）

# 火災報知器と脚本の書き方

ものごとには手順というものがある。  
手順のとおりすすむのであれば、問題ないけど、だいたいそうは進まない。  
とくに火災報知器だ。  
常日頃、無言でいて、その存在は知られない。  
沈黙のメニューは時計の針よりも神秘的で、知らなかったことを悔やまれるとしても本望なほど、羊の夢に夕焼けていく。空のことはいつも示唆的だ。  
脚本と人生の関係も運動会の靴紐ほどに強固な結び方でひらがなだった。  
やわらかいほうがいいが、やわらかすぎても、現実はごりっと風呂敷につつま。  
下敷きのしたから芽がでて、はるいちばんに吹かれて、きついま、俳句どきだわ！Go!Go!ハイク！みんな  
でハイク！こんなにことばがおどってしまうハイクな道をわたしは走って、息あがって、たちどまって歩く。

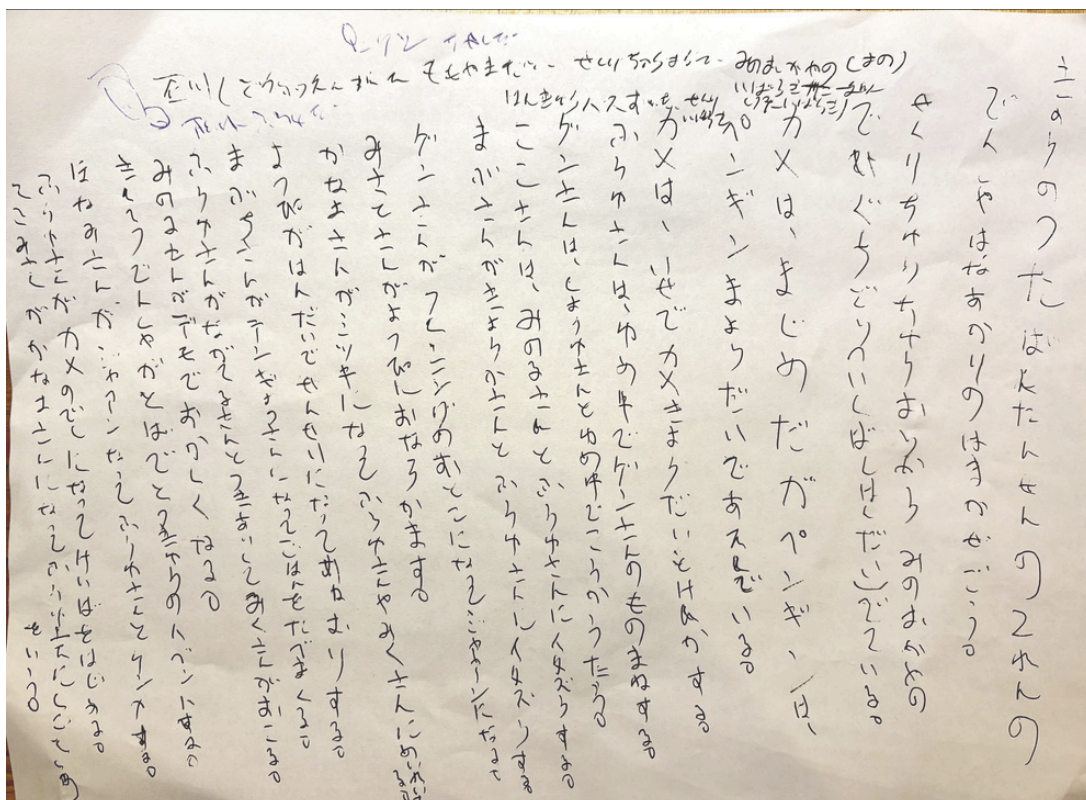
手をのばす（春のイルカにあいたい）

## 「知らんけど ヒトノデアウ 赤の他人」

関西弁を説明するのに特に楽しいのがこの「知らんけど」。「知らん」＝本当に知らない、「知らんねん」＝知らなくてごめん、「知らんがな」＝自分には関係ない、「知らんし」＝どうでもいいわ、など、どれも微妙に違う。その中でも代表格的「知らんけど」。自分はよく知らない。でも、親切心から、知ってる限りのことを教えたい。でも責任は持てないよ。怒らんといてな。そんなニュアンスが、会話の後に添えられる、この短い中に詰め込まれている。これを使いこなせる人は「オオサカジンだなあ」と思う。

でも、これらの言葉は最も大切なことを知っている。人は、自分自身を含めて、み～んな赤の他人なのだ。赤の他人のことが簡単に分かるわけがない。それでも分かろうとするから何もかもがあるんやと思う。どんな戦争も分からんから始まるけど、どんな平和も、「分からん」赤の他人であることからしか始まらない、と思う。知らんけど。

ユキ（遅れてきた人）



←いしかわくんの  
原稿です

# Japanese Culture WA 和

私ハ独リダ フダン サケヲノミ ウタヲ唄っている  
一人デネテ 一人デオキテ 一人デ風呂ハイリテ ヒトリウンコ  
サミシーネ 夫モ是モ ジゴージトク

今now、かまげいにきています がっさくはいくして した  
テレビきてた アナウンサー カメラ マイクきてた  
フダン 独リノ私ニトッテ よいじかんでした

そして やはりとゆーか なんちゆーか  
日本ハ スペサル 独特だな と思いました みなが みなをきづかい そーかいた人ノ  
きもちをくみとろうとするとおもしろかったし たのしかったし しあわせやった

がっさくはいくのさくひんの中で気になったのは  
何でやねん ホクオーのまちにておかにアウ よいと思いました  
がっさくはいくのさいしょのテーマが「方言」で十作品 それぞれの人×3でおもしろい  
そして 少し テレビがはいって常のかんきょうとちがいましたがよかったです

かまげいスタッフの海外の人も参加して（スパニッシュ）よかったのと 参加した日本の人が  
ハイクノ中にスペイン語ヲいれていてそれもおもしろかった けっか とても おもしろくて

ココいいとこや とおもたよニワもあるし

U(近所のおじ)



今日の合作俳句の様子 2026年2月23日

## 活動継続への寄付を募っています

- 三井住友銀行 天王寺駅前支店 普通  
1585265
- りそな銀行 萩之茶屋支店 普通 0200091  
名義：特定非営利活動法人  
こえとことばとこころの部屋
- 郵便振替  
記号 01090-5-48059 名義：ココルーム

## 参加費について

釜芸はみなさんの寄付で運営しています。  
生活保護や困窮されている方：気軽に無料でご  
参加ください。  
ふとこに余裕のある方：活動への賛同として  
1講座1000円以上、応援参加費2000円、加勢  
参加費3000円の寄付を  
お願いします。

## 発行元

NPO法人こえとことばとこころの部屋  
(ココルーム)  
557-0002 大阪市西成区太子2-3-3  
06-6636-1612 info@cocoroom.org

## 編集後記

はじめての釜芸「ZINEづくり」。「ぼえ犬通信」というココルームが発行するフリーペーパーを編集する機会があり、それがおもしろく、何か出版する試みをしたいと思い、この企画に至る。

最初に1時間合作俳句を行った。合作俳句とは、上の句、中の句、下の句それぞれの作者が異なる俳句。一つのテーマをもとに、三人で分け合って俳句を作ります。今回のテーマは「方言」。

合作俳句のあと、ZINEづくり。参加者がそれぞれ、今回の合作俳句をめぐってエッセイを書きました。エッセイの内容は、前に作った合作俳句のテーマについて、個々の俳句について、俳句にある一つの言葉について、あるいは、合作俳句の面白さ、難しさなどなど。

約3時間で作ったZINE。だいが無茶をしました。(大阪環状線歩いて一周男)